



離島の高校に勤務して感じたこと

鹿児島県高等学校教職員組合 峰元 賢一

2年前に奄美大島へ単身赴任で引っ越してきました。鹿児島県の公立高校の場合、1度は離島へ赴任します。1回の赴任は4年～5年が標準です。同じ鹿児島県でありながら、奄美大島は本土とは違って亜熱帯海洋性気候で植生も異なっています。理科(生物)を専門としている私にとってはとても興味深い島です。初めて本校に来た時に、中庭にはヘゴやビロウ、トックリキワタ、ガジュマルなど亜熱帯特有の植物が植えられており、教科書でしか見たことなかった世界が広がっていることに感動しました。

ただ、それとは別に離島の学校に勤務して初めて大変さが分かることも沢山あります。

特に離島の不便さを感じるのは部活動の時です。部活の試合があるのはもちろん鹿児島県本土。試合会場に着くまで一苦労です。奄美大島の場合、夜9時に出航して、翌日の朝9時頃に到着。風の時はいいのですが、台風の時期や悪い天気が続くと海は大荒れになります。船の揺れのせいで酔ってしまい気分が悪くなる生徒も続出することもあります。まだ体全体が揺れている感覚が残っている状態で鹿児島について、翌日の試合の準備のために練習会場へ直行します。練習会場を大会主催者が用意してくれればいいのですが、そうでない競技の場合は練習会場を事前に予約したり、会場が遠い場合はバスなどを使って離れた練習会場へいくこともあります。練習後は宿泊施設へ。いざ試合に出ると他校の威圧感と会場の雰囲気にもまれてしまい実力を出せないまま敗戦してしまうこともしばしば。試合に負けた場合は夕方6時発のフェリーに乗るため、急いで帰る準備をして帰路につきます。奄美大島に到着するのは朝の5時。生徒を見送り、帰宅して朝食をとり、そのまま学校へ。引率する教職員も大変だけど、生徒も大変です。また、試合出場のための遠征費は大きな負担となります。しかも、試合に勝ち残れば勝ち残るほど宿泊費はさらに大きく膨れ上がります。

生徒の経済的な負担はさることながら、学校の授業措置も大変です。一つの大会でだいたい1週間程度は引率のために教職員が不在になります。その間は他の教職員が対応したり、自習にしたりしなければなりません。また、次の週に違う部活の生徒が大会出場のために学校を公欠になると、生徒によっては約2週間も該当の授業を受けられないことも少なくありません。

3年生の受験においても同じです。多くの生徒は島外へ進学します。受験の2日前に島を出発し、受験会場の近くに到着。次の日は受験会場を下見して、その次の日ようやく受験。飛行機や船の時間が合わない場合はもう一泊して次の日に帰路につきます。奄美大島の場合、東京・大阪・福岡へ飛行機の直行便があります。それでも高い受験料と受験旅行費用は大きな負担になります。

それ以外にも台風シーズンになればスーパーから食料品が消えてしまったり、急遽飛行機が飛ばなくなって計画を変更しないといけなくなったり、今日は晴れたと思ったら急に大雨になってびしょびしょに濡れてしまったり、と不便に感じてしまうことがあります。でも、これらのことは島の子どもたちにとっては“普通”のことです。不便だなんて感じてしまうのは、今まで本土で生活をしていた私の実感です。

2年目になり少しずつ島の普通の生活に慣れてきたように思います。今は11月。まだ「あったかいな」と思って半袖でいる私の目の前で、「寒い」といってプルプル震えている生徒を見ると、まだ島の普通に慣れていないと感じる今日この頃です。

